

Eureka XII

六年制通信 No.26 令和6年11月8日(金)号

千歳不易

校長室に梅村学園だった頃の「建学の精神」の額が飾ってあります。今の学校法人三重高等学校もこの精神を受け継いでいます。皆さんご存じの建学の精神「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」と「四大綱」が列挙されたあと、「このような精神の体得者は個人としても家庭人としても社会人としても国民としても世界人類の一人としてもまことに望ましい人間である。このような教育は如何なる国の如何なる時代においても肯定され歓迎される本質を有する」と続いています。いかがですか。どんな立場の人間でも、どこに生まれようと、どんな時代に生きようと、建学の精神は歓迎され四大綱の体得を目指す教育は本質的に肯定されるということですね。

この部分を目にすると私はいつも「不易流行」という言葉を思い出します。不易は千歳不易(せんざいふえき)でずっと変わらないこと、流行は一時流行で意味は読んだ通りです。教育はその本質として不易の部分大切にしなければならぬのであって、流行だけを追ってはいけないということを教えられている気がします。

人間の本質はそう簡単には変わらないということもよく知っておく必要があると思います。そして、その本質の基礎となるものを育むのが教育だと思います。時代が変わると文明が進み世の中は何でも速く手軽にできるようになるので、便利になった分だけ昔の人に比べて現代を生きる自分たちの方が人として優秀であると誤解する人が出てきます。しかしそう考える時点で人として劣っていますわな。謙虚さを失っているのですから。今の価値観が昔に比べて進化している素晴らしいものだと考えるのであれば、十年もたてば今の価値観は劣った人間の価値観として断罪されることでしょう。文明が発展しても人間が優秀になったわけではありません。一つの便利は人間が持っていた一つの能力を失わせるのではないかとするとむしろ便利になった分だけ人は劣化していくのではないかとすら思えます。

文系理系の区別はあまり好きではないですが、世の中を便利にするのは理系の領域です。それは現代人の研究が先人たちのたどり着いた所をスタートとして始められるからです。積み重ねることができるわけですね。それで新しい文明の利器が開発され続けるのです。しかし人間の知恵というのは、その人一代で完結です。一人の人間がたどり着いた境地から他人が始めることは出来ません。現代においても『論語』の知恵を越えるものが出ないのはそういうわけです。理系は駅伝のようなもの、文系はマラソンのようなもの、そう言えるでしょう。精神の修養という点では先人たちの知恵を借りながらも、マラソンのように一人で走り切らなければならないのですね。

平和な時代に生まれ育った私たちは現在の生活状況や物事の価値観が未来永劫変わらない前提で生きている、それは非常に危険なことだと警鐘を鳴らしたのは山本七平だったと思います。彼の『日本人の人生観』でしたかな（違うかもしれませんが）、戦後 30 年目の感想として山本自身戦前に 30 年を生き戦後に 30 年を生きたと（確か 60 歳の時の講演ではなかったか）。その間、戦前戦後で日本は真逆の価値観に覆われたというのです。このあたりは歴史で習いますね。ということは現代に生きる私たちの日常も考え方も「流行」の領域であって、いつこれが覆されるかわからないと思いながら生きなければならぬわけですね。難しいことですけど。

「流行」を追わず「不易」を大切にする教育とは、どんな時代にも大切であるものでなければならないわけですから、人間の基礎中の基礎となるもの、つまり人と動物とを隔てるもの、人を人たらしめているもの、それは「言葉」ということになると思います。前にも書きましたが、中学高校で行われる教育は畢竟言語教育に収斂されるべきでしょう。しつこいですが「読む」「聞く」のインプットを欠かさず豊かな語彙を手に入れ、「話す」「書く」のアウトプットの練習によって言葉を自在に操れるようになれば、社会に出て君たちが困ることはないと思います。未知のものに対する独学の力が十分に備わっているでしょうから。中学高校では辛抱強く、普遍的な言葉の能力を身につけるよう、自分でも意識して勉強してください。

収斂（しゅうれん）：一つにまとまること。まとめること。「意見を収斂する」

今週のおすすめ

・呉 勝浩 『爆弾』（講談社文庫）

これは好みが分かれるでしょうね。舞台はある警察署の取調室。主人公は最初から最後までここにいます。つまらない傷害事件を犯して事情聴取を受ける中年男性。名前を聞かれるとスズキタゴサクと答える。住所は忘れた。財布も空っぽ。ただ一つだけ、自分は何の役にも立たない人間だけど靈感があるので刑事さんのお役に立てるかも、秋葉原で爆発がありますよ、と。で、実際に起こるわけ。こいつが爆弾を仕掛けたのか、そして爆弾はこの一つだけなのか。そこから冴えない中年男と刑事の頭脳戦が始まります。人の心には悪魔が、いろんな姿で、大きかったり小さかったりサイズも違うでしょうが、悪意の強さもそれぞれでしょうが、確かにいるのではないかな。そういうところをネチネチ読者に突きつけてくる気がします。タゴサクは本当に腹が立つし、取り調べの刑事はあまりに天才的だし、ちょっと現実的ではないかな。タゴサクさん、若い日の経歴が謎のままなのですが、非常に賢くて悪意に満ちています。このあたり、どうしてこんな怪物ができあがったのかを知りたいんですが、著者は答えてくれません。いい感じの男女の警察官が登場するのですが、ラブストーリーを展開しようとして途中で気が変わったのではないかと、読んでいて思いました。

爆弾の謎、犯人の謎、これらの謎解きは普通です。というか、警察内の上下関係とか謎解きとは関係ないことをいろいろ詰めすぎて紙面が足らなくなっているのかな。もう少し的を絞って丁寧に描いてほしかったというのが私の感想。

BGM は Little Eva の *The Loco-Motion* でした…。